眼鏡越しのこはい眼

水野仙子

時たまに會ふ知人の印象とは違つて、曾て親しく師事し、又其當時家庭の一員ともなつてゐた私には、今これぞといつて先生の印象を茲に摘出するのに却て困難を感じます。ですからあれこれと迷はずに、いつそ初めてお目にかゝて、それからお世話になるやうになつた時分の事をお話する事にしませう。

明治四十二年の四月に、やつとの事で兩親を納得させて東京に出て來た私は、ともかく麹町の姉の友達が住んでゐるのを頼つて一寸の間置いて貰ふ事にしました。其處から當分圖書館にでも通つて勉強しようかといふやうな心だつたのですが、實のところたゞもう心が緊張してるばかりで何にも手につかず、遊ぶともなしに數日を暮してしまひました。

或日の事それは多分日曜でした——私は何とか今後の方針を決める積りで、先生にお目にかゝりさへすればどうにか心持ちが決まりさうに思へて、代々木のお宅にお伺ひしようと出掛けました。どうしてそんな氣がしたかといへば、當時先生と前田氏とがやつて居られた文章世界に投書などしてゐた關係と、まだ私が國に居た時分に、「東京に出て來てやつてみたらいゝだらうに」と私に就いて話されたやうな事が、それとなく私の耳にはひつてゐて、とにかく或點を多少なりとも知つて頂いてるやうな氣がしたからでした。

其時分私はまだ全くの田舎娘で、東京は愚か、自分の國の町以外にはめつたに踏み出した事も無い上に、一人で人を訪ねるなんてことは初めだつたものですから、先生の家の門の前には立つて見ても、さてどうしても入る事が出來ませんでした。お宅は丁度道の四つ角になつてるところで、今は無いけれど其頃はまだ可なり大きな栗林が屋敷續きになつて角にありました。そして邸の兩脇も後も細い道になつて居るのです。私はどうしても其嚴めしく見えた門を潜る事が出來なくて、二三遍ぐるぐると垣に添うてお宅を巡りました。そしてやつとの事思ひ切つて、重い門の潜り戸に手を掛けました、

玄關に出て來られたのは奥さんでした。私は用意して行つた名刺を——鳥の子紙を小さく切つて筆で服部ていと本名を書いたものです——出して先生にお目にかゝりたい旨を告げました。間もなく奥さんは再び出て來られて、あのどんな御用なんでせうか、唯今一寸書いてる所なものですからと仰言います。私は一寸失望しました。先生は私の本名を御存じなかつたかしらと思ひながら、格別の要事とてはないけれど、お目にか

ゝつていろいろお話を伺ひたいと思つて上りましたといふと、奥さんはもう一度書齋の方に行かれたと思ふと、直ぐに引返して來られて、「ではどうぞこちらへ」と實に造作もなく招じられたので、私はほつとしました。

私が客間の隅にかしこまると間もなく、廊下續きの書齋から足音強く出て來られた先生は、「やあ失禮しました、一寸思ひ出せなかつたものですからね」と初めてとは思へにやうな親しい調子で、「いつこちらに出て來ました」などゝ早速煙草を爐べながらせつかちにお尋ねになります。がつしりとした相當な大きな體格と眼鏡越しに對手を見入る怖い眼――それは御自分の言葉の切れ目なぞに、對手がそれをどう受け入れたかを見ようとするやうに不用意になされる癖で、怖いけれども其怖さには陰險だとか、皮肉だとか、又は威壓しようとするやうな底意がない――とはいへ、花袋といふ優しげな（聞けば匂ひ袋のことださうな）雅號の持主としての想像に馴れた眼には全く別人の如く映る位でした。尤も其青年時代の寫眞などを雜誌の口繪で見た事もありますから、一面には決してそれを意外とも思はないのですが、先入主といふものはしかし可なり根強いもので、なんでも日露戰爭の時、博文館發行の日露戰爭實記（？）といふ雜誌の口繪に、從軍記者團の寫眞が出てゐました。そして後列の何人目が田山花袋氏といふ事になつてゐるので、段々とそれを辿つて行つて見ると、小説家などゝは思へぬやうな嚴丈なおつかない顔をした人の姿だつたので、意外と思ふならまだしも、其脇に寫つてゐる一寸好男子風な男がさうなのを、編輯者が間違へたものだらうなんどゝ思つてゐたのです。私に限らず讀者の此想像と實際との錯誤は、當時他の人よりも多く先生の場合にあつたやうでした。

其日は私の身の振り方に就てもいろ〳〵お尋ね下すつたので、出て來た以上はどうにかして自分でやつて行かなければならないのだけれど、ほんの田舍娘の自分は雜誌の訪問記者をやる程の勇氣も知惠もないから、何處かに小間使ひにでも入らうかと思つてゐますと云ふとそんな事ではなか〳〵勉強が出來まい、兎も角前田君とも相談して何とか考へて置かうと仰言つて下さいました。

それからまた二日ばかり經つてお伺ひすると、「僕の家に置いて上げてもいゝのだけれど、實は以前度々さういふ世話をしては失敗した經驗があるものですからね、それに今は子供が多勢だし、又部屋を一つ貴女のにつて上げる譯にも行かない。それでもよければだが、君はどうしようと思ひますか。」とさつさと話を運ばせて下さるので、私も思ひ切つて「置いて頂きたう

ございます」と言ひました。「さうですか、ぢやさうしたまへ」と先生のお話は手つ取り早いものでした。元來が性急な率直なお気象なので、物事に勿體をつけたり、様子ぶつたりするやうな事は微塵もなく、なんでも思つた通りにさつさとやつて行かれるといふ風でした。

かうして私は間もなく其玄關に起臥する事となつたのですが、「僕はどうも師弟の關係を硯友社流の人達が其弟子に對したやうに、所謂弟子と先生といふ風に取扱ひたくはない、自分の家に置く以上はやはり自分の家族の一員としてみたいと思ふ。」と仰言つた事があるやうに、先生初め奥さんもお子さん達も、私を食客や玄關番扱ひには決してなさいませんでした。

去年の夏、私がこちらに歸國する前に暫くぶりでお伺ひした時、先生のお頭には大分白髪が見えたと思ひましたつけ、なんだか先生は段々隱かないゝおぢいさん、（といふにはまだ早いけれど）になつて來さうに思はれます。其現在の面影をかきのけて、當時の印象をぼつ〳〵辿つて見ると私は夜遲く玄關の机の前で先生のお歸りを待ちながら、いつの間にか眠りこけてゐる自分の姿がまづ目に泛んで來ます。やがて門の戸が開いて、がり〳〵と砂礫を踏む下駄の音がすると、がらりと玄關の戸が開いて、飛び込むやうに下駄を脱いで先生の大きな體が現はれる。間もなく「おい、りさ〳〵〳〵……（奥さんの名）」といふやうなせつかちな調子によつて家の中の空氣が俄かに動き出すのでした。

【入力者注】

底本では「こと」の合字が使用されている箇所がありますが（64-2）、「こと」に置き換えてあります。

底本と改行を合せるために、フォントサイズを小さくした箇所があります。

底本：「新潮」大正六年八月一日發行
テキスト入力：小林　徹
公開：令和四年四月十日

リンク：水野仙子作品年譜
水野仙子ホームページ